

子宮頸がんワクチン接種後に神経症状を呈した患者の当院における診察状況

研究分担者 桑原 聡 千葉大学医学部脳神経内科 教授
研究協力者 関口 縁、平野成樹 千葉大学医学部脳神経内科

研究要旨

子宮頸がんワクチン接種後に脳神経障害を呈し当院を受診した患者について、診察・検査による評価および治療の現状を検討した。体位性起立頻拍症候群と高次機能検査、脳血流SPECTでの血流異常を比較的高頻度に認め、一部の症例で治療前後の変化を認めた。これらの所見が病態を反映しているかについて、同年代の正常対照および疾患対照との比較検討が必要である

A. 研究目的

子宮頸がんワクチン接種後にみられる神経障害は、症状が多彩かつ経過が長期にわたること、脳MRI異常、血清学的異常などの検査所見に乏しいことが、病態の把握をより困難なものにしている。子宮頸がんワクチン接種後に神経障害を呈した患者を自律神経機能、高次大脳機能の面から評価するとともに、治療の現状と反応性について検討する。

B. 研究方法

子宮頸がんワクチン接種後の多彩な症状を主訴に当科を受診した20名の患者において、以下の各種検査を行った。またそのうち1年以上経過を追えた長期観察例9症例の治療経過に関して、後方視的に検討を行った。

- 身体診察
- 生理学的検査：自律神経機能検査・神経伝導検査・痛み関連SEPなど
- 画像検査：脳MRI、脳血流SPECT (IMP-SPECT)
- 高次機能検査：WAIS-III

(倫理面への配慮)

個人情報に関する厳重な配慮を行った。人を対象とする医学系研究に関する倫理指針に基づき、倫理委員会による審査を経て、当該研究についてホームページ上で公開し、研究を行った。

C. 研究結果

本年度の新規患者数は0例、継続患者数は8例であった。

対象の20例でみると、発症時年齢は中央値14歳（範囲13-19）、初診時年齢は18歳（範囲16-21

歳）であった。初回ワクチン接種から発症まで中央値14ヶ月（範囲0-62ヶ月）、発症から初診までは43か月（範囲0-72ヶ月）であった。初診時症状は、広範な疼痛（頭痛・四肢痛・移動性関節痛）が11例、易疲労・倦怠感が10例、睡眠障害および不随意運動がそれぞれ9例、学習障害が8例であった。

自律神経機能検査では、体位性起立頻拍症候群を12例中4例で、皮膚温低下と起立性低血圧をそれぞれ2例認めた。高次機能検査では9例中7例で処理速度の低下を認めた。SPECTでは11例中10例で血流低下が疑われたが、血流低下部位に一定の傾向は認められなかった。当科にて血液浄化療法を行った6例のうち、1例は不変、他は倦怠感や疼痛など一部症状の改善を認めた。しかし長期的には現在も6割以上が通学・就業に重大な支障をきたしていた。治療前後の検査所見は、自律神経機能検査で1例が起立後頻脈の改善、SPECT4例中3例で脳血流低下の改善傾向が認められたが、変化のパターンは一定でなかった。

D. 考察

子宮頸がんワクチン接種後に神経障害を呈する患者において脳血流低下、高次機能障害、自律神経機能異常を示唆する所見が認められ、一部は免疫治療後に変化が認められた。しかし変化のパターンは一定でなく、これらの所見が病態を反映しているかについては、同年代の正常対照および疾患対照との比較検討が必要である。

E. 結論

子宮頸がんワクチン接種後に疼痛、高次機能障害を呈する患者には脳血流低下、高次機能障害、自律神経機能異常が存在する可能性がある。

今後同年代の正常対照および疾患対照群との比較検討を要する。

F. 研究発表（本研究課題に関連したもの）
特記すべきことなし

G. 知的財産権の出願・登録状況
（予定を含む）
特記すべきことなし